

長崎にて

くダメなことはダメと言い続けるといふことく

瀬尾 奎太

僕は二〇代の前半あたりから、長期の休みを取って「R」の青春18切符を使って、のんびりと旅をすることを一つの楽しみとしている。

その年の夏は、住まいのある奈良から四国、九州、そして中国地方というように周ることにした。もちろん、期間や予算に限りがあるので、通り過ぎるだけの県やそもそも行けない県が出てきてしまう。この旅は特段目的があるわけでもなく、どこに行くかはその時の僕の気分次第だ。

ちょうど八月の前半だったので、蝉の鳴き声と共に夏らしい太陽が出ている時期だった。この時期に、僕が毎年頭の中に浮かぶのは「広島・長崎」だ。

小学生六年生の頃に、修学旅行で広島と山口に行った。広島ではいわゆる平和学習の一環として、平和記念公園を訪れた。学校で事前学習として「はだしのゲン」やビデオでの映像学習を見ており、子どもながらにとっても残酷なことが起きたのだということは思っていた。

しかし、実際に広島平和記念資料館に行くと、あまりの壮絶な資料にもはや言葉を失った。特に印象的だったのは、「人影の石」と呼ばれるものだ。これは、原爆のあまりの熱線により階段に座っていた人の影がそこに焼き付いたというものだ。

それ以来、父方の祖父母が広島出身(市内ではない)ということもあり、原爆の事についてずっと興味・関心を抱いていた。

旅の話に戻るが、このような経緯から八月の前半になると僕はいつも原爆のことを思い出す。別に身内に被爆者がいるわけでもないのだが、何だか他人事としては片づけられない思いがずっと心にあるのだ。そして、ずっと気掛かりだったことは長崎にはまだ訪れたことがなかったことだ。テレビで映る平和公園での平和記念式典は毎年見ていたが、実際に行ったことはない。

これは今年長崎に行くしかないなと思いついて、その時に居た熊本から迷いなく長崎に向かった。その日の長崎は、入道雲が出ていても暑い夏日だった。一九四五年八月九日の朝も、こんな夏だったのかなと思いを寄せながら、長崎駅から路面電車に乗り平和公園へと向かった。長崎市というのは四方八方から山に囲まれていて、それも原爆の被害は(広島に比べると)少なかつたという話を耳にしたことがあるが、確かに周りに山や丘が多い地域だなと思った。

平和公園に着くと、まずは資料館に行った。教科書や資料集で見たことがあった被爆者の十字架が大量に展示されていたことが大変印象的だった。その後、象徴的な像のある場所へ行った。広島に行ったときもそうだったが、長崎でも平和公園周辺を歩いていると、原爆が落ちた当時の状況を想像し、どんなに悲惨な状況だったのだろうと思わされる。

僕にとって、広島や長崎を訪れたことは僕の戦争観や歴史観に大きく影響を与えている。戦争はやってはいけない、戦争は非人道的だ・・・などということは多くの人々が賛同することだろう。しかし、二〇二二年二月二十四日のロシアのウクライナ侵攻によって、社会情勢は大きく変わった。もちろん、いつの時代もどこかで戦争が起きているので、そういう意味では人類は戦争

状態をずっと続けているのだが、二十一世紀の時代に堂々と一国が他国を攻めるということが起こったことに、世界中の人々が驚嘆した。テレビでは、コメンテーターがロシアの目的や、侵攻の有罪性を述べている。僕たちはそれを聞いて戦争はダメだと思う。

この時、ちょうど日本でも核武装の話が少し浮上した。日本は、非核三原則を掲げ核兵器とは一線を画している(在日米軍の核の持ち込み問題はあがあるが…)。

その時期に、仲の良い友人と話していた際、「核兵器を持つべきか」という話題になった。僕はとにかく理由は思いつかなかったが、日本は核兵器を持つべきではないと言った。対して、友人は持つべきといった。理由は、日本が他国に攻められないように威嚇の意味で云々…という核保有賛同者がよく使う論法だ。議論がだんだん熱くなり、しまいには二人とも感情的になり喧嘩になった。今となつては良い思い出だ。

別に彼を責めるわけでもないし、自分が正しいとなぞとは思っていないが、油断すると、日本も核兵器を保有するべきという世論はすぐに出来てしまうのではないかと心から危惧するきっかけとなった出来事だった。

僕が、日本は核兵器を持つべきではないと思う理由は、広島・長崎での惨劇を日本人は忘れて良いのか?という感情的なものだ。しかし、「何が何でもダメなものダメ」という感情論も時には大事なのではないかと思っている。僕が今でもこのように考えるのは、旅で言った広島・長崎で見たこと、聞いたこと、感じたことが大きく影響している。

当時の戦争を実際に経験した方々は、高齢化も進み、人数が減ってきている。実際に戦禍に巻き込まれた方々は、「何が何でも戦争はダメだ」という思いを持っておられた。しかし、実際に戦争を経験していない世代は、ふと油断すると、正当化の論理に陥り、戦争はイヤだが、いざというときは仕方ないという思考になってしまう。そういうときに、核兵器がもたらした事実を知ることがとても大事だと思う。

戦争や核兵器を肯定する者は、心のどこかで「誰かのための平和のためには、誰かの犠牲が必要だ」と考えているのではないか。実際、この社会はそうなっているし、僕も致し方ないのかと思うこともある。しかし、「誰かの犠牲のもとに成り立っているような社会なんてクソだ!」と思うことは大事だ。核兵器が守ってくれるものなんて、せいぜい一部の権力者の地位と権力ぐらいだ。

「理由は分からない。でも、ダメなものはダメ!」という精神で、これからも核兵器にはNOを突き付けていきたいと思う。